

さすらいのハブジロー

宇検村立田検小学校

四年 亀石 理希

「俺様はハブ

おっと近よるな。

俺様の牙は鋭くとがっているぜ。

おっと近よるんじゃねえよ。

俺様の毒は強力で、

かまれたらみんないちころよ。」

誰よりも目立つ大島つむぎの様な渋い柄のマントを頭から尻尾の先までビシッと決めて今日も行く先は決めずにフラリフラリの一人旅。友達や家族は何かと面倒くさい。俺様には一人が似合う。寂しいことも昔はあったかも知れない。だけど、もうすっかり一人に慣れた。一人はいい。誰に文句を言われることも無い。好きな時に好きなことをしてられる。風の吹くまま気の向くまま旅をしている。俺様はさすらいのハブなのだ。

ある日、いつもの様に一人でのんびりと昼寝をしていた時のことだ。

小さなハブがチョロチョロと俺様の足元を行つた

り来たりしているものでゆっくり眠れやしない。とうとう、

「お前、何やってんだ。俺様を誰だと思ってる。」

大きな声で叫んだ。小さなハブはブルブルしながら

「す、すみません。」

とおびえた声で言った。よく見るとまだまだ小さい子供のハブだった。

「さつきからお前何やってんだ。」

ジローは少し優しい声で聞いてみた。

「はい。実は、お父さんとおじいちゃんが病氣なんです。それでこの木の実を食べると病氣が治ると聞いたのでなんとかこの木の実を取れないものかと

色々試していたのです。昼寝の邪魔をしてごめんなさい。」

と、小さいハブは謝りました。小さいハブが手に入れようとしている木の实というのは赤くて木のとっぺんにしかない、食べれば病氣が治ると言い伝えのある不老不死の木の实のことだ。話を聞いてジローは面倒くさいなあと思ったけれど、どうしたってこのチビに木の実を取ることには無理だろうから仕方なく木の实を取ってあげることにした。スルスルスルと木のとっぺんまで登り、赤い木の実をあつと言う間に取ってチビハブの前に持って来た。小さいハブは目をパチクリ

とさせた。ジローが、

「おいチビ、これを持って行きな。」

と軽く言うとチビハブは目に涙をいっぱい浮かべてジローをまつすぐに見て、

「ジローさん。本当にありがとうございます。本当にありがとうございます。」

と何度も何度もお礼を言いました。ジローは少し嬉しかったのですが、いつもの様に面倒くさそうに

「さっさと持って行きな。」

と言いました。チビの後姿を見ながらジローはちよつと胸がワクワクとしました。だけど俺様はさすらいのハブジローだから笑うなんてことはできないのだ。

それから何日かして、偶然、こないだのチビハブに会った。チビハブが、

「ジローさん、おかげ様でお父さんとおじいちゃんはずっかり元気になりました。」

と言って、その病気が治ったお父さんとおじいちゃんを指さした。

「おう、それは良かったなあ。」

と言いながらジローはふり向いた。そして、ジローは黙って固まった。ジローの見た二匹のハブ。一匹はジローのお父さん。もう一匹はジローの兄さんのイチローだったのだ。マンガースとの戦いで家族はみんな死

んだと思っていた。

「お父さん、イチロー兄さん。」

ジローは涙をこぼし、転がるようにして二匹の所へかけよった。

「ジロー、生きていたんだね。」

お父さんと兄さんも嬉しくて嬉しくて三匹で抱き合った。ジローは泣いた。笑った。喜んだ。思わず、

「神様、ありがとうございます。」

と言って笑わせた。それからみんなで色んな話をした。沢山笑ってたくさん喜んでそして少し泣いた。ジローは思った。一緒に居てくれる家族が居る。話を聞いてくれる相手が居る。一人じゃない。みんなが居る。何だか分かんないけど体の中から力が出てくる。そうだ。もう、さすらいの一人旅は終わったのだ。

だけど長い間格好つけてきたので性格はすぐには変わらない。今ではちよつと迫力は無いけれど散歩の時はお決まりのこの言葉を言っているジローだ。

「俺様はハブ

おつと近よるな。」

俺様の牙は鋭くのがっているぜ。

おつと近よるんじゃねえよ。

俺様の毒は強力で、

かまれたらみんないちころよ。」

